

「自然災害伝承碑」の代表事例



**洪水
土砂災害**
(兵庫県芦屋市)

昭和13年(1938)阪神地方は空前の大水害に見舞われた。6月28日から降り出した雨は、7月5日には最大雨量(1日326mm)を測る大風雨伴う豪雨となり、土石流の発生によって芦屋川と宮川が氾濫した。土砂崩壊や巨石の流出により、精道村(芦屋市の前身)でも多くの箇所が泥沼化した。



地震
(兵庫県神戸市)

平成7年(1995)1月17日に発生した阪神・淡路大震災は6,437名の死者・行方不明者を出した。震災を記憶し、復興の歩みを後世に伝え、犠牲者の慰霊と市民への励まし、大規模災害に対する世界的規模での連帯による復興の意義をアピールする。



洪水
(大阪府高槻市)

大正6年(1917)10月1日、台風による大雨で淀川の水位が上昇し、高槻市大塚町の堤防が200mにわたって決壊した。家屋は流され、倒壊し、死傷者は数十人にのぼった。後世への戒めが碑文に刻まれている。



津波
(和歌山県田辺市)

安政南海地震(1854)と昭和南海地震(1946)による津波災害を忘れないため、津波潮位を刻んでいる。カニのはさみをモチーフとしたデザインで、ハサミの先端が当時の津波潮位。